

「滝ッズ」大集合！ 第二回 奈良市鶯の滝 楠田行展

皆さんご機嫌いかがでしょうか。滝行ってます？ボクは行ってます。インナー・シティでは出逢えない、木々の緑や水の音、生き物の声を味わって感動しています。言語化できない感動ってイイな。それでは今回もいきましょう。

今回は奈良県奈良市の鶯(ウグイス)の滝を紹介します。この滝は奈良市内を流れる佐保川の源流で春日山原始林からの水を集めて落としています。落差は約10m、岩盤を滑るように水が落ちていく感じがとても◎。昼でも薄暗く周囲は静かで、しっとりとした空気に満ちています。うーん、趣き深い。苔むした岩を眺めながら、夏には涼を求めるとは持ってこい。そしてこれからの紅葉の季節はホントに綺麗です。家族連れやカップル、じいちゃんとかもよく来ています。デートに最適の滝だよ。歓喜天もあるし。

ところで、滝の所在する春日山原始林は杉や檜などの照葉樹林からなるのですが、1924(大正13)年に国の特別天然記念物に指定されています。また1998(平成10)年12月には藤原氏の氏神の春日大社とその鎮守の森であるこの春日山原始林はユネスコの世界文化遺産にも登録されました。少し調べてみますと、この原生林、平安時代の841(承和8)年に伐採・狩猟が禁じられて以来、春日大社の聖域として保護されてきたらしいです。1100年以上も手付かずの自然って凄いです。世界遺産に登録されるのも納得、納得！です。

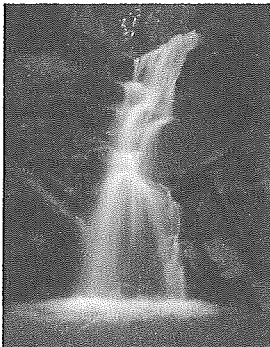
この滝へのアクセスは下に載せた通りなんですボクは好きな裏ルートがあります。それは奈良市生流里(フルサト)町というところから山道をしたことと歩くルートです。これはマップル等の地図をご覧になれば想像できると思います。30分くらいで滝に着くのですが、途中ジャングルみたいな獣道が現れます。野生の猪とか鹿がいそう怖いんですよ。ちょっと退くかも。初めて行った時ボクは恐怖で変な汗をかきながらダッシュしたことを覚えています。自然に畏怖し、美しさに辿り着く、これも自然の中ならではの体験かも知れませんね。

次回は熊野、南紀地方の滝日記spです。ご期待下さい。

【鶯の滝】

交通:近鉄奈良駅から

- ①→車で春日奥山
ドライブウェイ(30分)
- ②→奈良交通バスで
「大仏殿・春日大社前」
「春日大社表参道」
(14分)
→徒歩で
春日大社(10分)
→散策コース
(1時間)



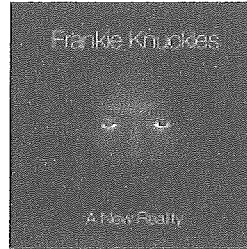
[CD] FRANKIE KNUCKLES / A New Reality

“ゴッド・ファーザー・オブ・ハウス”ことフランキー・ナックルズの1995年以来となる久々のアルバム。

曲は全て繋がっており、ミックス・アルバム風に仕上げられています。曲間にはイエローで録音されたという「フランキー」の叫び声を配し、ライブ・ヴォイスがつくる雰囲気はまさにクラブでDJを聴いているかのような気にさせてくれると同時に、クラブで聴きたいという気を起こさせてくれます。

全体に「フランキー健在」な、いかにものスタイルは流石の一言。ベタでありながらもついつい聴き入ってしまいます。それぞれの曲自体も良いのですが、やはりこれは全体を通して伝わってくるヴァイブスが良い感じですね。ハウス誕生からの第一線ぶりが十分に堪能できます。参加するメンツもC.C.ロジャース、ジェイミー・プリンシパル(「baby wants to ride」!!)といった豪華メンバーでハウスのエッセンスが凝縮の一枚。オススメ!

(ITARU.W)



pick up of the issue

モーターシティの地下音楽案内

next collective

次回collectiveは
12月19日(日)を予定しています。
クリスマス・セレブレーションとまいります
う!
お待ちしております!

<http://www.sound.jp/collective/>

collectiveについてのご意見・ご感想・ご要望などをお待ちしています!
collective_mail@hotmail.com まで気軽にメールしてください。

press collective

モーターシティの地下音楽案内

「テクノとはテクノロジーを使って感情を表現することだ。」 — デリック・メイ

1. イントロダクション

アメリカ、ミシガン州の都市デトロイトは、かつて自動車産業で栄えた街として有名です。しかし近年のこの街のイメージというと、スラムと化した荒れ果てた市街地や高い犯罪発生率といったマイナスのものばかりです。ブラックパワーや公民権運動の盛んだった時代、1967年の大暴動によって街は荒れ、白人たちは郊外へと移り住み、その後の自動車産業の斜陽化によって街はゲットーになっていったのです。

しかしこの街のアンダーグラウンド・ダンスミュージック・カルチャーが、世界中のテクノ・ハウスファンに大きな影響を与えていることをご存知でしょうか。今回はcollectiveメンバーも刺激を受け続けている、このデトロイトのダンスミュージックをご紹介します。

この音楽はどんな背景を持ち、どんな歴史を辿ってきたのか、現在のデトロイトシーンはどうなのか。日本で僕たちが知りうる情報からお伝えしたいと思います。ぜひフリーペーパーと連動したMIX-CDを聴きながらお読みください。

2. デトロイト・テクノの歴史

皆さんはエレクトリファイン・モジョというラジオDJをご存知でしょうか。デトロイト・テクノを準備するのに多大な影響力があった人です。リスナーに素顔を一切見せず、淡々と曲をかけるモジョはPファンク、クラフトワーク、ドナ・サマーのディスコ、イタリア産の機械仕掛けのポップス、そしてプリンスなどもラジオ上で紹介したらしいです。デトロイトのクリエイターでモジョの存在を知らない人間はおそらくいません。そして、影響されなかった人間もいないでしょう。そして現在もラジオDJを継続しているらしいです。

モジョがかけたクラフトワークの”the robots”に「凍てついた」という感想を抱いた青年はその手の音楽に目覚めます。彼の名はホアン・アトキンスと言います。ホアンは高校生の頃、デリック・メイ、ケヴィン・サンダーソンと出会います。彼らは様々な音楽を毎日のように聴き、お互いの音楽に対する理解を深めていったようです。

ホアンのサイボトロン名義での代表曲”clear”ではモロにクラフトワークの影響がうかがい知ることができます。サイボロンの作ったその手の音楽がデトロイト・テクノの最初です。その後ホアンは、<metroplex> (以降、山カッパはレコードレーベル名)を設立し作曲活動を始め、デリックはシカゴ・ハウスのDJ、フランキー・ナックルズらの影響を受け、<transmat>を、ケヴィンは<kms>といった具合に各々レーベルを立ち上げていきます。

また、デリックはシカゴで体験したことをデトロイトに広めたいという思いから「ミュージック・インスティテュート」というクラブを開きます。そこには後に<planet e>で活躍するカール・クレイグ、<plus 8>を発足するリッチー・ハウデンなど次の世代のクリエイターが集まっていた。この頃からホアン、デリック、ケヴィンの三人はデトロイトからの新しい音楽、「テクノ」のオリジネーターとして、当時ヨーロッパで巻き起こってきたレイヴと重なり広く世間に認められるようになり、「テクノ=デトロイト」という図式が確立します。

デリックのようにシカゴ・ハウスのクラブで衝撃を受けたマッド・マイクはデトロイトに戻り楽器店で電子楽器を探していました。そのときホアンに出会い、ハウスを作ります。そのハウスのバンド活動中にジェフ・ミルズと出会い、アンダーグラウンドから音楽によりメジャーの利益追従主義に反抗する目的で<UR (underground resistance)>を立ち上げます。

デリックが曲を作らなくなった90年代以降、デトロイトのシーンを支えてきたのはカール・クレイグとURでした。カール・クレイグといえばデリックの弟子であることで知られていますが、多種多様な名義とその音楽性でスマートにシーンに受け入れられました。URの音楽にはハードな感じの曲や、叙情的で美しい感じの曲など様々です。そしてリリースされる曲ごとに込められたメッセージも様々。変化に富む二者がシーンを支えていました。

そしてデトロイトの第三世代と言われるムーディーマン、リクルース、セオ・パリッシュが台頭し今日に至っています。

3. デトロイト・アンダーグラウンドの現状

ここからは、デトロイトの現状を見ていくことにしましょう。これまでデトロイトのダンスサウンドといえば、早いテンポの機械的でハードなリズムと未来的で流麗なシンセサウンドの「テクノ」が主流でした。しかし最近のデトロイト・サウンドは「ハウス化」の進行が顕著です。ヒットする曲も、ゆったりとしたテンポでよりオーガニックな感触をもった曲が多くなっています。ムーディーマンやセオ・パリッシュといったデトロイトハウスの代表格の過去のシングルが再プレスされ、新曲やアルバムもハイペースでリリースされています。セオ・パリッシュに至っては、今年の来日で東京の有名なクラブ「YELLOW」の動員記録を塗り替えており、デトロイト・ハウスの人気や勢いを見せ付けています。<UR>や<transmat>なども、最近のリリースはハウス調の曲が多くなっています。そしてジャズ系にも人気の天才カール・クレイグの活躍ぶり、その愛弟子リクルースや、スティーヴィー・ワンダーばりのヴォーカルの持ち主でもあるアンプ・ファイドラーの台頭もデトロイトのハウスシーンが成熟のときを迎えていることを示していると言えるでしょう。

さらにこの1年ほど、デトロイト・ブームとでも言えるほど、デトロイトの過去の名作が次々と再リリースされています。通常のCDと違って、これらのアンダーグラウンドなレコードはプレス枚数も限られており、売り切れればそれでおしまいです。こうした再プレスによって、過去の名作に触れられるのは非常にいいことです。

しかし、こうした再盤盤が注目を浴びる一方で、最近デトロイトから衝撃的なニューカマーが少ないことがちょっと気になります。実際、様々なデトロイト関連のインタビュー記事などでも、「デトロイトでは下の世代が育っていない」というような発言をたびたび見かけます。若いリスナーたちはメジャーなR&Bやヒップホップを好んでいるようで、<moods&grooves>という人気ハウスレーベルを主宰するマイク・グラントですら、お客さんが集まらないためデトロイトでは年に1度くらいしかパーティができないという状況だとも伝えられています。

とはいえ、最近のデトロイト・ハウスのもつ音楽的な幅広さが今後デトロイトのシーンを変えていく可能性もあります。デトロイトのアンダーグラウンド・ミュージックがどうなっていくのか、これは今後も期待せずにはいられません。

確実なのは、今後もこの音楽が資本に回収されることなく、リアルなブラックミュージックとして真摯に存在し続けるだろうということです。

(楠田行展 + Kengo Matsui)

collectiveメンバーによる”Detroit Classics”全曲一言解説！

1. CYBOTRON “Clear”

ホアン・アトキンスの初期代表曲。モロ、クラフトワーク。過去にとらわれ前進できないのなら、過去を「消去せよ」。

2. MODEL 500 “Night Drive~thru babylon~”

ロボット・ボイスで、「タイム・スペース・トランスマット」と繰り返して、疾走していく。ここで歌われる「トランスマット」はデリックのレーベル名になった。

3. RHYTHM IS RHYTHM “Strings Of Life ~unreleased mix~”

デリックの地位を不動にした名曲。エモーショナルで叙情的。夢と希望を曲に託した。

4. INNER CITY “Good Life”

「悪い時代は終わり、悲しみも涙も今はない、私たちのグッド・ライフが始まる」。

5. BFC “Galaxy”

カール・クレイグによる、流れるようなテクノ・トラック。まるで宇宙遊泳のような浮遊感。

6. PAPERCLIP PEOPLE “Throw”

hit and runというクラシックの一部を延々ループしたグルーヴィーなトラック。センスが秀逸。

7. UNDERGROUND RESISTANCE “Hi-Tech Jazz”

URを代表する一曲。カッコいい一言に尽きるんですが、永遠のアンセムです。

8. RECLOOSE “M.L.A.”

ヨーロッパのニュージャズにも通じる、新世代のデトロイト・サウンド。デトロイトの成熟を感じる。クール。

9. AMP DOG KNIGHT’S “I’m Doing Fine”

元ファンクバンドのキーボーディストによる名曲。やさしく、あたたかく、泥臭い。ボーカルが甘く素敵。

10. INNERZONE ORCHESTRA “People Make The World Go Round ~Moodymann mix~”

ゆったり始まり途中でハウスビートになり、そして最後はまたゆったりと終わっていく、ムード満点の曲。カール・クレイグのジャズ心とムーディーマンの黒さの強力タッグ。

11. INFINITI “Thought Process”

ホアンの、アンビエントで素敵なお曲。何か繊細で締めがいいと思いました。

(ITARU.W + 楠田行展 + Kengo Matsui)